

# 手塚ファン magazine



今月のファンマガ表紙は

「バンパイヤ」 第一回



週刊少年サンデー 1966年6月12日号





二階堂黎人の黒犬黒猫館  
http://nikaidou.a.la9.jp/

第82回 休刊に寄せて

1

第79回で、講談社の全集の『SFミックス(1)』に収録された「バックネットの青い影」に言及しておいたところ、手塚マニアの先輩・高松直丘氏からメールが届いた。僕は、この作品のカラーの扉絵を載せ、『バックネットの青い影』の初出は『別冊冒険王』であると記した。

しかし、高松氏から、「別冊冒険王」での初出時は、「バックネットの青い彼」という題名でした。会誌に載った図版は、改題されて、「別冊まんが王」に載った時のものではないですか」との、ありがたい御指摘をいただいた。

あわてて、故・森晴路氏の作った『手塚治虫初出作品リスト』を確認したら、確かに、1962年10月20日 バックネットの青い彼 別冊冒険王 秋季号/秋田書店 ※単行本時「バックネットの青い影」と改題と、記されていた。

僕の場合、この短編を最初に読んだのは、一九六八年に、小学館のゴールデン・コミックス版『鉄腕アトム(3)』に収録された時だった。それからずっと、僕はこの作品を「バックネットの青い影」と認識して愛読してきた。それほど、改題されたものの方がミステリアスで、内容的にピタリだったからだ。

何にせよ、ちゃんと確認しなかった僕のミスである。手塚マンガの書誌はこれほどに奥深いと、あらためて思い知ったのだ。



「バックネットの青い影」扉絵  
(高松直丘氏提供)

2

最近、入手した手塚治虫作品は、次の二種類。

一つ目は、『海のトリトン』の単行本表紙絵を使った、新書判サイズのノート。『夏のまんが祭りプレゼント』と書かれているので、秋田書店が、新書判のサンデーコミックスと少年チャンピオン・コミックスの販売促進のために、書店などで配ったものだと思うられる。

この絵と同じものを表紙に使ったサンデーコミックス版『海のトリトン(4)』は、一九七三(昭和四十八)年四月に刊行されている。よって、このノートは、同年の夏に配られたのではないかと想像できる。

ちなみに、『海のトリトン』の初単行本化が、このサンデーコ

ミックス版の新書判全四巻である。原題は『青いトリトン』。六九年九月一日から七一年十二月三十一日まで『サンケイ新聞』に連載されたものである。単行本化にあたって、テレビ・アニメ版と同じものに改題されたのだ。



秋田書店のマンガ・ノート

二つ目のお宝は、『ぼうけんルビ』の紙芝居。大きさは葉書大で、六枚の絵がある。小学館の学年誌の付録だったと思われる。『冒険ルビ』は、虫プロでのアニメ化を念頭に、学年誌に連載されたものであり、次のような学年で描かれた(※四月号からは、進級して学年が上がる)。ただし、アニメ化が実現しなかったため、や尻切れトンボのような形で終わってしまった。

- (A) 『ぼうけんルビ』幼稚園〜小学一年生 七〇年二月〜七月号
- (B) 『ぼうけんルビ』幼稚園 七〇年四月号
- (C) 『冒険ルビ』小学一年生〜小学二年生 六九年十月〜七〇年七月
- (D) 『冒険ルビ』小学二年生〜小学三年生 六九年十月〜七〇年六月

この内、(C)と(D)は、講談社の全集によって初めて単行本化された。学年誌に掲載されたから、どれもカラー・ページがふんだんにあったが、単行本では白黒になってしまっているのが残念である。

物語の設定はこう。

宇宙の果てから、宇宙の星々を食ってしまう大怪物ゾンダが地球を目指してやって来る。このままでは、銀河も地球も滅亡して

チクワが宇宙船で飛んでいると、頭と手に大きな磁石を付けた磁石怪獣が現われる。三人が、これを退治するというお話である。



『ほうけんルビ』紙芝居より

るびは げんきな  
おとこのこ、りこ  
は やさしい おん  
なのこ。  
ふたりで、ちから  
をあわせて、わる  
い かいじゅうを  
やっつけます。さあ、  
ほうけん るびの  
はじまりです。

ルビとリコと、仲間になった宇宙人の

裏の文章は次のとおり。  
先の紙芝居だが、『ほうけんルビ』手塚治虫・えと記されているので、幼稚園版の付録だと思われる。ただし、家にある分の切り抜きを調べても、掲載号は解らなかった。

しかし、この年代の学年誌は、『ウルトラマン』関係のグラビアが多く、怪獣マニアも集めている。よって、古書価が高く、『冒険ルビ』の掲載されているものが欲しいと思っても、なかなか手に入らない。だから、『冒険ルビ』は、すべてのバージョンで、カラーによる完全復刻が望まれる。

というわけで、特殊な能力を得たルビオとクリコが、宇宙のあちこちに出かけ、大冒険を繰り広げるといふ非常に面白い物語だ。僕は、手塚治虫のこの手のSFが大好きなので、かなり好きな作品である。

実は、今回から、一九七九年に創設された手塚治虫ファンクラブのことや、会誌の『手塚ファンマガジン』の発刊の経緯などを書く予定であった。

それまで、故・森晴路氏が会長を務めていた旧・手塚治虫ファンクラブは、手塚治虫並びに手塚プロによる『公認ファンクラブ』であった。そして、手塚プロ主宰で新たに活動を開始したものは、『公式ファンクラブ』ということになる。

その創設時から数年間、当時大学生だった僕は——会長という名目で——手塚治虫ファンクラブ事務局の手伝いをさせてもらった。会誌の発行、編集、記事の執筆、企画立案、九段会館で毎年行なわれた手塚治虫ファン大会の開催など、様々な事柄にかかわった。

ある意味、この時期が手塚マニアである僕の青春時代であり、思い入れの深い出来事が多数あった。それに、今だから明かせる秘話などもある。

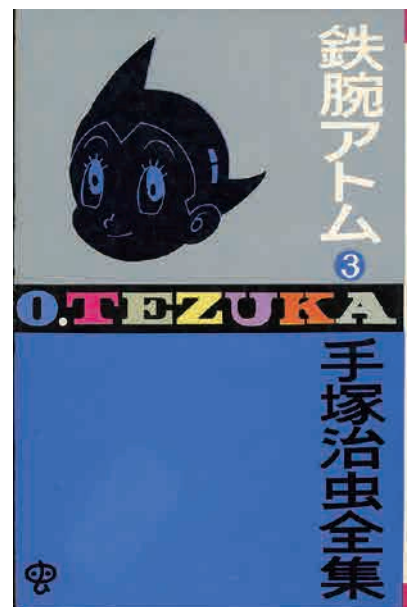
もともと、『僕らが愛した手塚治虫』は、この時期（七八年から八五年くらいまで）の思い出を書こうとして始めた評伝だった。小学館のPR誌の編集長に案を提示したところ、すぐに採用されて、連載が始まったのだった。僕の妻は、ファンクラブ事務局の二代目の事務局員だったので、僕以上に手塚プロの内情に詳しいという利点もあった。

この『手塚ファンマガジン』では、二〇一二年より、第二部の連載を続けてきた。

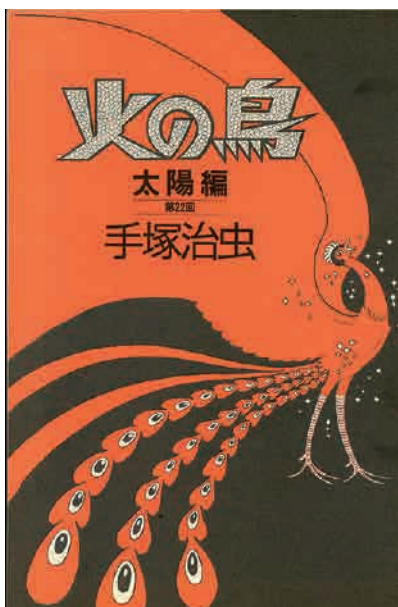
そしてやっと、手塚治虫ファンクラブ創設時代に入るところであつたわけだが、ここに至るまでに、何と、単行本で五冊になる原稿を書くことになった。事前に説明しておく必要があることが多数あったため、僕の生年の五九（昭和三十四年）あたりから話を始めた。同年に週刊誌の『少年サンデー』と『少年マガジン』が創刊されたことや、六十三（三十八）年からは、虫プロ制作のテレビ・アニメ『鉄腕アトム』の放映が始まり、第一次テレビ・アニメ・ブームが起きたからだ。

それほどまでに、手塚マンガと手塚治虫の仕事は膨大であり、話題が豊富であった。

なんにせよ、会誌の創刊号の原稿を書き、四十年後のこの最終号でも原稿を書いている僕にとっては、複雑な感慨があり、残念な気持ちも強い。



鉄腕アトム(3)』小学館



『火の鳥(太陽編)』扉絵

僕がこの『僕らが愛した手塚治虫』を書き続ける理由も、その一つだ。  
手塚治虫にとつて『火の鳥』がライフワークであつたように、手塚マニアである僕にとつては、『僕らが愛した手塚治虫』がライフワークなのである。今回、会誌の休刊に伴って第二部が終了するわけだけれど、いつかまた別の媒体で再開できればと希望している。

それまで、読者の皆さんとはしばしのお別れとなります。長い間の御愛読、ありがとうございます。

# 私の中の 手塚治虫



第98回 /  
松谷孝征さん

取材・文 濱田高志



本連載も最終回。今回は、手塚プロダクション代表取締役社長の松谷孝征さんにお話を伺った。手塚先生との思い出については、これまでも『手塚治虫 壁を越える言葉』（かんき出版刊）をはじめとする著書や、さまざま取材の場で語ってこられたが、本項ではそれを踏まえて、改めて手塚先生との思い出と、ファンへの想いを伺った。

まずは幼少時の手塚体験から伺います。

松谷：やっぱり『鉄腕アトム』ですね。私が小学校に入ったのは昭和26年、『アトム大使』が始まった年です。その後3年生ぐらいの時から、うちと三軒並んで同級生が住んでいたんで、それぞれ月刊誌『少年』『冒険王』『少年画報』等を分担して買っては、それを交換して読んでいたんです。私には兄や姉がいたので、幼少時は、彼らが読んでいたものも一緒に読んでいました。その頃は手塚作品というよりも、山川惣治さんの『少年ケヤ』のような絵物語を好んで読んでいましたね。ですから、手塚治虫という名前を意識したのは、ずつとあとの話です。我々の時代は、小学校を卒業すると漫画雑誌は読まなくなりましたから。その後、漫画週刊誌が次々に創刊されて、大学生の頃、再び『少年マガジン』や『少年サンデー』などの漫画を読むようになったんです。アルバイト先の駅ビルのなかに、中華菓子屋があった、その親父が漫画好きだったんです。発売日になると、駅の何番ホームの売店が一番最初に売るから、あそこで買って来てくれと頼まれて、買いに走ったりしましたね。でも、その当時は、手塚作品よりは、ちばてつや先生の『ハリス旋風』などを熱心に読んでいました。

—では、手塚作品を意識的に読むようになったのは？

松谷：私が実業之日本社に入って（漫画サンデー）の編集部配属されてからです。私はもともとグラフィックと活字部分の担当だったんですが、漫画をもっと増やそうということから、次第にそういった頁がなくなつて、漫画を担当するようになったんです。当初は谷岡やすじさんや小島功さんを担当していたんですね。ところが、あれは昭和47年（72年）だったかな。暮れと新年の2週連続で25頁、25頁の前後編で50ページの読み切り、そして、さらに同時期に出す増刊号で50頁の読み切り短編を手塚治虫に依

頼しようという話が出て、それを私が担当することになったんです。漫画部の連中は、それまでに手塚番で連載を担当していましたから、その偉大さを判っているんですが、私はというところ、会議の席で、「今さら手塚治虫はないんじゃないの？」と言って反対したくらいですから、それだけ手塚治虫のことを知らなかった。

—担当された2作品というのが、『レボリューション』（漫画サンデー）1973年1月6日号+13日号、1月20日号掲載と『ペーター・キュルテンの記録』（同）1973年1月10日号ですね。その時が、手塚先生との初対面ですか。

松谷：それ以前にも富士見台でちらっと見かけたりはしましたが、親しく話すようなことはなかったですから、ちゃんと挨拶して話すようになったのは、それがきっかけですね。10月頃から原稿をもらうまで2ヶ月以上ずっと泊まり込んだんです。

—最初に交わされた言葉は覚えていらっしゃいますか。

松谷：いやいや、覚えてないですよ。せいぜい「よろしく」くらいだったんじゃないかな。

—原稿を依頼するにあたっての打ち合わせはどんな感じでしたか。

松谷：打ち合わせはほとんどないですね。手塚の場合は、だいたい打ち合わせはしないんですよ。ほかの編集者の場合も、せいぜい頁数と締め切りの確認くらいで、基本的にはお任せです。『レボリューション』の時も、2週で前後編50頁、そして増刊号読み切り50頁と伝えただけです。すると、手塚は「いいですよ」って、それだけです。

—では、原稿が上がってくるまで内容がわからないんですね。

松谷：いや、先にネームをもらうので、完成前におおよその内容はわかりますけどね。

—完成した原稿を受け取った時はどんな印象でしたか。

松谷：さすがに、しっかりした作品だな、と思いますよ。でも、同時に、読者受けするかなとも思いました。暗い話だし。ただ、原稿を受け取るまでの2ヶ月半、事務所に寝泊まりしながら、当時出ていた手塚の単行本を片っ端から読み返したんです。それこそ『鉄腕アトム』から『ジャングル大帝』や『火の鳥』なんかを。それを読んで驚いたんですよ。これはすごいな、と。子どもの頃に読んでいた印象と全然違ったんです。27歳になってはじめて、手塚治

虫ですすごいなと実感しました。

—『レボリューション』と『ペーター・キュルテンの記録』を受け取った翌年（1973年）には、手塚プロにマネージャーとして入られました。その経緯を教えてください。

松谷：原稿を待つていた2ヶ月半の間、手塚のもとへ、虫プロの組員が来た時、虫プロ商社の社長が資金繰りの話し等しているのを目の当たりにして、なんで、なんだかゴタゴタしているのを感じていたんです。原稿をもらって2ヶ月くらいでしょうか。突然、先生のマネージャーから電話がかかってくる。松谷さん、うちでマネージャーやってくれないかな」と言われたんです。先生も（実業之日本社に）挨拶に行くと言っている」と。当時、先生には2人のマネージャーがいたんですけど、私が寝泊まりしていた頃には二人は外に別会社を作つて、そっちに専念していたんです。ですから、私が詰めていた頃も、いきなりお金を渡されて、「これでアシスタントに夜食の手配してやってよ」と頼まれたりして、実質的にマネージャーの代理というか、真似ごとをやっていたので、そこを見込まれたようなんです。あいつは、2ヶ月半、全然家に帰らなくても大丈夫だったって（笑）。

—しかし、実業之日本社を辞めて手塚先生のマネージャーになるというからは、それなりの覚悟が必要だったのではないですか。

松谷：全然。卒業後も就職せずに、学生時代の仲間と作った劇団で公演をしたり、アルバイトを転々としていたりしていましたから。それこそ新聞配達から始まって、工場やなんか、いろいろやってたんですよ。初めて正社員として入ったのは、百科事典の販売をする会社で、そこには一年くらいいたのかな。そのあと、実業之日本社に編集者として入って、そこには、二年半いました。歓迎会で「生まれて初めて二年半同じ会社で勤めました」と挨拶をしたのを覚えています。私は飽き性だから、すぐに飽きちゃうんですね。（漫画サンデー）では、当初グラフィック担当だったのが、途中から漫画担当になったんですよ。それ以降、漫画家と一緒に飲むのはいいんだけど、結局、何回か行くと飽きちゃって。谷岡やすじさんくらいかな、その後もよく一緒に飲んだのは、でも、そのうち訪ねて行けば原稿をもらえらるし、それすら飽きてきちゃって（笑）。手塚プロから声がかかったのは、そんな頃だったんです。実際、後日、編集部

に手塚が来てくれましたしね。そういえば『レボリ

ユーシオン」のなかで劇団が出てくるんですが、その名前を考えていた時に、「あなた、劇団やっていたんですよ。何かいい名前ない？」って、劇団名を相談されたことを思い出しました(笑)。

手塚のそばにいて何か面白そうだなと感じたのと、給料を含め、提示された待遇も良かったんです。私が入った頃に、ちょうどアニメ『ふしぎなメルモ』の制作が終わったんです。だから、手塚も「今はガタガタしていますけど、僕はもうアニメはやめますから。アニメをやらなければ(漫画)原稿だけなので、安心して下さい」と言われたんです。実際その後5年間は辛抱してアニメはやらなかつたです。からね、『100万年地球の旅 バンダーブック』(78年)まで。もともとそんな状況ではなかつたですからね。

— 虫プロダクション、虫プロ商事二社の状況を見ると当時の手塚プロの状況も、いわば沈みゆく船に乗るようなリスクもあつたわけですよ。

松谷：その頃には、私自身が手塚治虫の偉大さを判つていましたし、手塚治虫は絶対にこのままじゃ終わらないと信じていたので、そこはあまり心配しませんでした。それに当時はまだ社長がいましてね。私は原稿のスケジュール管理をやれば良かっただけなので。でも、当時の手塚はその後に比べると、大した量は描いていないですよ。また、『ブラック・ジャック』も始まつていないし、せいぜい絵本や学年誌で『チツポくんこんにちは』とか、週刊誌で『ミクロイドS』を描いていた程度でしたから。もともと、私が入った年の8月に虫プロ商事が潰れて、11月頃、虫プロダクションが潰れたので、そのあたりで債権者集会なんかの対応があつて、大変でしたけど。ただ、親父には「せつかく出版社に入つたのに、お前何をやってるんだ」と言われました。私は「いや、手塚治虫っていう人はほかとは違うんだ」って話すんだけど、判つてもらえないんですよ。そこで漫画の単行本を送つても仕方ないから、新聞や雑誌に載つた記事を送るようにしたんです。それから1年半か2年経つた頃かな。私を受けたインタビュー記事を見た親父が、「お前な、先生のことを、彼」とか言うんじゃない。「先生」と呼ぶか、あるいは身内と思うなら「手塚」と呼びなさい」と。いつの間にか、手塚治虫が相当すごい人間だつてことを認識したんです。おそろく周囲からも聞いたんですよ。きつと、飽きたらすぐ辞めると思つていたんですよけど、それがすつと続いているんですからね。

— ある意味で親孝行になつたわけですね。その後の状況はいかがでしたか。

松谷：私が入社した頃は、(少年チャンピオン)2代目編集長の壁村(耐三)さんがしよつちゆう手塚を訪ねて来ていて、「うちで描いてくれ」って言うていました。で、色々整理がついたタイミングで1973年11月から『ブラック・ジャック』の連載が始まるんです。当時、『手塚治虫が劇画に負けた』みたいな記事が週刊誌に載つたんですよ。その時の手塚は「ふざけるんじゃない!」と、反論したりしていましたが、要は会社のごたごたで描けなかつたから本数が減つていただけで、実際のところ手塚はもう描きたくしょうがなかつた。そこで描いたのが『ブラック・ジャック』で、それが当たつたわけです。

— 『ブラック・ジャック』の内容についても事前に綿密な打ち合わせや相談はなかつたのですか。

松谷：ないない。手塚と壁村さん、私の3人である時に、手塚から「医者が主人公というのはどうですか?」という話が出たんですけど、壁村さんはそのまま受け入れましたからね。だつて、壁村さんとはかく手塚に描かせたいんだから。後日、壁村さんと話した際には、少年漫画の雑誌で医者が主人公の漫画なんて：と思つたそうだけど、あの時は描かせたい一心だつたと言つていましたね。私だつて、同じ感想でしたよ。でも、『ブラック・ジャック』は、手塚にとつては、自分が描きたい「生と死」に一番近い設定の作品だから描きやすかつたんだと思います。

— 結果的に長期連載、そして代表作のひとつになりました。

松谷：当時、手塚はこの作品は5回で終わるんだと話していたんです。これは、ブラック・ジャックが母親を殺された敵討ちをする復讐劇だ。勿論、編集者からも4、5回の連載といわれていましたから。ところが、3回くらいで少し人気が出ちゃつたものだから、いつの間にかその復讐劇という設定が消えちゃつたんです。で、その後も連載つてことになつたんです。

— 翌年1974年7月には、『三つ目がおと』の連載が始まつています。

松谷：私が手塚から唯「寝められたのがそれですよ。あなた、マガジンの連載取つてきたんですか」って驚かれて、「いやいや、向こう(講談社)から打診があつたんです」って言つたんですけど、「へー」つてびつくりしていました。マガジンとは例の『W3』

の一件以来、付き合いがなかつたですから。当時の(少年マガジン)編集部は宮原(照夫)さんと私は外で飲む機会が多くて、私がマネージャーになつたことで、宮原さんも手塚のところに来やすかつたんですよ。もつとも、ブラック・ジャックの人気が一番きつかけですね。

— 松谷さんが潤滑的な役割を担われたんですね。ところで、執筆時の手塚先生の様子を教えてください。

松谷：とにかく、ずつと描いていましたね。疲れて睡眠に襲われても、15分寝ては起きて、また描いてという感じでした。私がマネージャーを担当するようになって1年経つか経たないかの頃「松谷氏、15分ごとに声をかけて起こして下さい」と言われて、そうしていた時期があつたんです。富士見台の仕事場は、仕事机の裏側に三畳くらいの畳敷きのスペースがあつて、そこで、15分寝て、起きたら寝転がったまま腹ばいになって、カリカリとペンを走らせていたんですよ。だけど、やっぱり徹夜が続くと効率があがらないんです。ですから、ある時期からは編者らと相談して、せめて3時間は寝かせてあげようということになつたんです。実際、3時間眠つたあとのスピードがすごいんです。1時間に5、6ページ上がつてくるんですよ。そうやって、手塚が数時間眠つていけると、僕はその間に新宿や六本木に出て、編集者と会つたり出来るじゃないですか。何しろ富士見台は夜12時を過ぎると開いている店が全然なかつたんですから。

— 手塚先生は漫画執筆以外にも漫画家の絵本の会やアニメ関連のイベントなど課外活動にも精力的でした。

松谷：例えば漫画家協会つてあるでしょう。あれがきちんと法人格になつた際には、とても喜んでいました。実は、生前の手塚にはいくつかの使命があつたんです。まずは「子どもたちにいい漫画を提供したい」、次いで「戦争の悲惨さと生命の大切さを人々に知らせたい」、そして、「漫画を文化として皆に認めさせたい」ということです。だから、漫画家協会が組織としてまとまると、世の中に漫画文化を啓蒙することで、戦争をなくす一助になればと考えていたんです。また、海外作家との交流にも積極的でした。手塚は、お互いが相手を理解していかないから戦争が起きるんだ、という考えで、だからこそ、漫画やアニメを通じて互いの理解を深めることに熱心なつたんです。現地に足を運ぶことで、国による慣習

の違いや、政治的背景が判りますから。だから、中国にもよく足を運ぶました。

— 手塚作品の今後について思つてることがあれば伺えますか。

松谷：いろいろ難しい局面に来ていたのは確かですね。例えば、今は電子書籍なんかで配信されることが増えていると思つていますが、手塚はあくまでも紙媒体のために描いたんです。ちゃんと左右見開きを念頭に、ページをめくつた時にどう見えるかなんてことを考えて、それが電子書籍だと崩れることもあるでしょう。それこそひとコマごとに表示されるスタイルの見せ方もあるじゃないですか。ああいうのは、手塚が生きていたら怒るでしょうね。そういえば、昭和50年代に、漫画が文庫本で出版されるようになったんですよ。

— 小学館文庫とか奇想天外文庫などですね

松谷：あの時、各社から文庫化の依頼があつて、それに対して手塚は怒つていましたからね。手塚は、掲載誌の紙面を意識して描いているので、「冗談じゃない。こんな小さいサイズで読むために描いているんじゃない」って。カケアミも潰れちゃうし。だけど、私の立場としては、無下に断れないから、手塚に相談したんです。そしたら、それこそナンセンス漫画であれば、「あれは描き込みも少ないし、あれならいいですよ」って言われて、あのあたりから文庫を出すようになりました。今は紙も印刷技術も格段に上がったから、問題ないですが、当時は抵抗がありましたね。

— では、最後にファンに対してメッセージをお願いします。

松谷：もし、可能なら、身近な人に手塚作品を勧めて下さいとお願ひしいです。私自身が勧めるとすれば、やはり読みやすい『ライオンブックス』や『タイガーブックス』などの短編シリーズ、具体的には、あそこ収録されている『安達が原』や『百物語』、『鉄腕アトム』の『ブラック・ルックスの巻』、あのエピソードも好きで忘れられないですね。それと、やはり『ジャングル大帝』、『火の鳥』はぜひ今の子どもにも読んでもらいたいです。今回ファンマガは休刊ということになりましたが、ファンの皆さんがいたからこそ、手塚はいろんな作品を描けたわけですよ。ファンには感謝しかありません。生前、手塚はファンを大切にしていました。そして、今後もぜひ近所のお子さんに手塚作品を紹介していただければ嬉しいですよ。



青天の霹靂と言う言葉がある。「手塚ファンマガジン」編集部の和田編集長から思いもよらないお手紙を頂いた。書状には「本年9月30日発行号で休刊の運びとなりました」とあった。ファンマガジンが343号で終わるとは驚かざるを得なかった。種々の事情があつてのことだろう。

手塚治虫先生生誕90年で、多くの復刊手塚漫画が書店の棚を賑わせている。この時期だけに休刊は残念だった。

私は昭和22(1947)年1月に発売された『新宝島』を級友から借りて、手塚漫画の虜となった。以降、幾星霜と手塚漫画を読み続けて来たオールドファンの一入だ。ファンマガジンの編集長さんも(私が知ってから)和久千賀さん、田崎陽大さん、和田 収さんと代替わりされたが、三人の編集長さんともお付き合いをして頂いた。

和田編集長になって、マガジンもリニューアルされ、大判でカラー化(一部)もされた。本誌の執筆メンバーも二階堂さん、野口さん、竹内さんと、いずれも手塚漫画研究のオーソリティで、毎号の連載を読むのが楽しみだった。

マガジン自体の休刊はオールドファンの一入として寂しいが、手塚漫画は多くの読者によって読み続けられることだろう。手塚先生が創造された『火の鳥』のように…。

末筆だが、三代にわたってマガジンの編集を担当された和久、田崎、和田ご三人に「ご苦労様でした」と心からお礼を申し上げるとともに出版元の手塚プロダクションにも感謝の念を捧げたい。

**渡辺 泰** オールドファンの一入

## 荻原(和久)千賀

(元・発行人)

和田さん、長い間お疲れ様でした。

投稿されている方のお名前の中に、見覚えのある名前を見つけ、とても暖かい気持ちになりました。

手塚ファンマガジンがなくなってしまうとのお知らせを聞き、編集に携わっていた頃のことを思い出して胸がいっぱいです。

ファンクラブを通じて、たくさんの方と交流が持てたこと。取材を通じて、ものづくりに携わる方たちの熱意を痛感したこと。困った時、手塚プロダクションの皆が助けてくれたこと。そしてなんと言っても、手塚先生と同じ時代を生きられたこと。全て、人生の宝です。

## デパカタイムマガジン 拡大版

最終号に向けてゆかりの方々からお言葉をいただきました。ここにご紹介させていただきます。ありがとうございました。

## 中野晴行

「手塚ファンマガジン」休刊の知らせを聞き残念です。

おそらく、手塚ファンの高齢化なども影響しているのかな、と思いますが、最近編集に関わった角川文庫の『火の鳥』の売れ行きなどを見ると、じわじわと若いファンも生まれているのではないかと思います。

彼らの受け皿として、WEBマガジンか何かで存続できるといいなと期待しています。

## 篠田ひでお

手塚先生の弟子・杉並の自宅にて

1979年から長年にわたって親しまれてきた「手塚ファンマガジン」が、9月30日343号をもって終了するようで…淋しい限りですね。担当された方々本当にご苦労様でした、そして有り難うございました。今年6月毎年恒例の、朝日新聞社主催の「手塚賞」の授賞式に出席した。先生、生誕90年とか、先生が生きておられたら90歳と言う事なのだ。ぼくは今年11月で80になる、ぼくが昭和33年先生のもとに弟子入りした時は、先生はまだ結婚されていなかった。

あれから時間はずーっと経つたはずなのに、改めて思い出すとついこの間の出来事の様な気がしてならない。本当に濃厚な時間だった…。

「手塚ファンマガジン」が終了しても、この世の中にマンガやアニメが無くならない限り、手塚先生はずーっと語り継がれてゆき、ファンも残って行く事でしょう。

それにしても「手塚ファンマガジン」終了は、淋しい話だなあ…。

令和元年7月7日 七夕の日に

## みなもと太郎

「なぜ、日本のマンガはこれだけ大発展したのか?それは手塚治虫がいたからだ」というフレーズは誰もが知っています。しかし手塚治虫の60年の人生は、出発点から闘いの連続でした。赤本時代からすでに手塚マンガは、無理解な教育界から睨まれ、吊上げられ、「焚書」までされました。昭和20~30年代のことです。

「マンガを読むとアホになる」と言われつつも、次のマンガ世代が目目されはじめると、世間は「手塚治虫はもう古い、手塚時代は終わった」と嘆いあげられるようになりました。これが昭和40年代ですね。虫プロがTVで『鉄腕アトム』を発表すると「絵が動かない」「電気紙芝居」と悪口を言われ、アニメ界からは「ほとんど全否定」されました。しかし現在、日本のTVアニメが「世界最高峰」と謳われるまでになったのは、その出発点に「無理にでも毎週三十分」放映を続けた「虫プロアニメ」があったからです。

再起不能、と言われた手塚治虫が『ブラック・ジャック』で返り咲いた頃から、世間は「悪口のタネがなくなった」かのように手塚批判をしなくなりました。

ほどなく手塚治虫は、21世紀を見ることなく60年の生涯を閉じます。手塚治虫が褒め称えられるようになったのは、実はこの頃から、と言つていいでしょう。せいぜい「晩年に至り、ようやく」ですね。それから30年、手塚治虫は教科書にも載る「偉人」になりました。

なぜ、日本のマンガはこれだけ大発展したのか、という、それは「手塚治虫が、あらゆる非難、悪口に耐え、はね返し、すべてに勝ち抜いてきたから」です。

手塚先生、有難う御座います。40年にも渡り手塚ファンを支え続けてきた「手塚ファンマガジン」に心からの尊敬と感謝を申し上げます。

## 田崎陽大(元・発行人)

長く続いたファンマガが遂に休刊との事、大変名残惜しいです。

在任中のファンマガ編集にまつわる思い出は色々ありますが、一時期発行がフラフラと不定期気味だった時に、手塚プロの古徳出版局長や故・森晴路さんに喝を入れられて月刊化に踏み切った事や、故・福元一義さんの連載が、FC発としては初めて書籍化された事(『手塚先生、締め切り過ぎます!』集英社新書)、またアンソロジストの濱田高志さんが連載陣に加わり、「音楽」という新しい切り口から手塚研究ができた事、そして手塚アニメに参加された著名な作曲家の方々に取材ができた事などは、特に印象に残っています。和田さんをはじめ、現編集スタッフの皆様、お疲れ様でした。





一大決心の末、貯金箱を壊してFCに入会したのは1979年のこと。私は小学五年生でした。以来、判型や発行ペースを変えつつも継続した会報が休刊するのは、実に寂しいことです。今年51歳になった私にとって、同誌は人生で最も長い定期購読誌でした。2002年の「アニメ音楽家名鑑」から「私の中の手塚治虫」まで、断続的に連載させて頂き、多くの方の貴重なお話を伺えたのは財産です。これも手塚先生が繋げてくれたご縁と感謝しています。ありがとうございます。

## 濱田高志

### 復刻の思い出

(元小学館クリエイティブ)

手塚作品の復刻をやっている時に森資料室長に、川村さんの企画は先生が存命ならNGです、と幾度か言われた『新寶島』や「創作ノート」の時だ。手塚作品を深く理解し、研究するために必須の物なので、今では先生も許してくださっていると思っている。でも、昨年パリの「アトム」1ページの落札価格が3500万円のニュースを聞いた現在では、その鑑定团的価値を考えると怖くて扱えないかもしれない。良い時期に復刻の仕事をさせてもらったと思う。

## 川村寛

## 三浦みつる

(元アシスタント/元漫画家)

まずは、長い間本当にお疲れさまでした。私事から恐縮ですが、自分が手塚プロのアシスタントを卒業したのが1977年。その二年後にファンマガジンは創刊しました。そして私は二年前に漫画家引退宣言をして、今回また二年後にファンマガジンが終了。なにかとても運命的なものを感じます。(自分だけですが…笑) 勿論ファンマガジンは『火の鳥』同様に永遠に続いて欲しかったと今でも思っています。生前、手塚先生はともファンを大切にしていました。それは自分がアシスタント時代に身近にいて、何度も実感しました。先生の魂はそのままファンマガジンへ

と受け継がれました。漫画の神様が手塚先生ならば、ファン(お客様)も皆神様です。神様と神様をつなぐ架け橋が、まさにファンマガジンでした。おそらく今後はWEBがその架け橋になることでしょう。そしてまた新たなファンが増え続けていくことを願っています。最後にあらためてファンマガジンへ「ありがとう！」と一言伝えたい。

## 鈴木伸一

### 手塚先生とディズニーでの思い出

日本にまだテレビアニメがなかった時代、ディズニーの短編や長編アニメを観てファンになってしまった私は、ひたすらディズニーアニメを追っていました。それは手塚先生の趣味とも重なっていたんだ…ということで、ディズニーに関係した話を少し…

幸運にもディズニーのスタッフと直接手紙を通して交流できるきっかけを作ったのは、人形アニメで有名な川本喜八郎さんでした。

私は外国語が全くダメなせに、フランス・アムシーで開催されるアニメフェスティバルに参加した時のこと、周りには有名なアニメ作家が沢山いるのに話も出来ない私に、「話をしたい人がいたら通訳しますよ」といって下さったのは川本さんでした。

これは渡りに船!とばかりにそれではディズニーの人がいたら…とお願いしたら捜して連れてきた下さったのはアシファの会長さんでした。

私はびっくりでしたがアメリカの人なら、私の好きなニン・オールドマンの消息位ならわかるかな、と聞いてもらった…なんと長編作品を専門に監督していたW・ライザーマン氏が交通事故で亡くなったという悲報でした。彼はスピードを出して運転するので事故を起こしてしまったのだろう、とても悲しいことです。でも、帰国したらあなたのことをニン・オールドマンに伝えておきますよ、ということで別れたのですが、これは儀礼的な言葉で、まあすぐ忘れてしまうだろうと思っていたのに、なんとその年の暮れにO・ジョンストン氏から手紙が来てビックリ仰天!

その後、F・トーマス氏からも来てすっかり舞い上がってしまいました。そうしてアシファの会長さんからはウォード・キンボール氏の住所も教えていただいたので、おかだえみこさんやら友人だったアメリカ人のミュージシャンやらを総動員して文通が始まり、キンボール氏が北京へ観光に行く途中で東京に寄るということも分かり、手塚先生も雑誌の仕事置いて駆けつけて来られました。

その翌年の暮、手塚先生に誘われてロサンゼルスに遊びに行き、憧れのディズニー・スタジオを見学、「白雪姫」「ピノキオ」「ファンタジア」など名作を撮影したマルチプレーンカメラに感激!

翌日、手塚先生も私も大ファンのウォード・キンボール氏宅を訪問しました。庭にはリアルサイズの鉄道線路が敷いてあって車庫には本物の蒸気機関車、客車などがあり、機関車への給水塔や駅舎まで完備した立派な鉄道です。彼は休日に蒸気機関車を運転して楽しんでいたので、ウォルト・ディズニーもよく遊びに来ていたそうですから、ディズニーランドの外周を走っている鉄道の原型がここにあるといっているでしょうね。また実物の消防自動車のコレクションが3台、汽車のおもちゃを展示した建物が二棟、また手塚先生が興味を示したのは彼が描いた沢山のマンガのスクラップ。漫画家でもある彼は有名なキャラクター

をいろいろ創作しています。ダンボのクラスたち、シンデレラの猫のルシファー、不思議の国のアリスのチェシャ猫、しかし一番有名なのはピノキオの「良心」として全編で活躍するジミニ・クリケットでしょうね。夕食時間になったので近所のメキシカン・レストランに行った時、手塚先生が「私は昔『ピノキオ』の漫画を描いたことのあるので、貴方が創ったジミニ・クリケットは今でも描けますよ」と卓上にあった紙ナプキンにマジックでサラサラと見事に描いたのを見て、ビックリしたキンボール氏「明日、スタジオに来て下さい、貴方に仕事があります!」と云ったので手塚先生ははじめ一同爆笑したのは楽しい思い出です。

▶1978年12月  
ウォード・キンボール氏邸に行つて



撮影:鈴木伸一

蟻と、誰がいったのか忘れてましたが、でも本当にそう思います。ピラミッドだって、ひとつづつ積まれた石からきているのです。ただ長くつづいただけじゃないかと、鼻で笑う人もいるでしょうが、そんなことをいうなら自分でやってみろ。手塚先生は巨大なクリエイターでした。だがその巨木が、今なお根をはり枝をのぼすことができるのは、営々と光をおくり水を与えるみなさんがいたからです。世の中は手塚先生が不安視していた方向へ、ゆっ

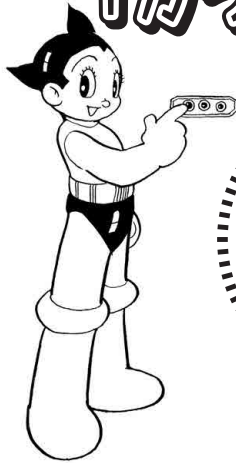
## 辻真先

### 「継続は力なり」

くりと傾斜してゆきそうです。マンガの奔放な楽しみを享受できなくなる、そんな時代にならないよう、お互いに力を尽くしてゆきたいものです。手塚先生とほぼおなじ世代のぼくは、息詰まる暗い世相を肌で感じとってききましたが、若いみなさんには遠く消え去る筈(こだま)かも知れません。でも、たとえ時は流れ去っても、手塚マンガの魅力は読み継がれてゆくのだと、ぼくは信じています。



# いまさら、 1から手塚治虫!



第69回

文  
竹内才サム

最終回に寄せて

今回が最後となります。これまでさまざまな手塚マンガを取り上げて、その特徴について書いてきました。最後、私と手塚マンガの関わりについて少し書くことにして、連載を終えたいと思います。

私は60代の後半。手塚マンガの第二世代の読者です。第一世代は1940年代後半(昭和20年代)の赤本マンガを読んで感激した人たち。手塚先生は、『新宝島』『来るべき世界』『メトロポリス』など、数多くの赤本マンガ単行本を大阪で出版しました。その読者たちということになります。

いまでは70代半ばから80代にかけての高齢の方。有名人で言えば、宮崎駿、さいとう・たかを、藤子不二雄(FさんとAさんの二人)、小松左京、赤塚不二夫さんたちが該当します。戦後すぐの貧しい文化状況のなかで、突出したストーリー展開のおもしろさや、テーマの重厚さ、表現の奇抜さに魅了された世代でした。

そのあと手塚先生は雑誌の世界に発表の場を移します。そして、『鉄腕アトム』や『ジャングル大帝』『リボンの騎士』などを執筆。もちろん第一世代の人たちも、そうしたマンガを読み継いでいきました。でもなかには、赤本マンガ単

行本時代とは作風がちがう、妥協してマンガを描いている、そのため雑誌連載のマンガはあまり評価しない。第一世代のファンには、そんな人が少なからずいるのです。

私は雑誌連載で手塚マンガに出会った、第二世代の読者のお尻の方にいます。ただし『鉄腕アトム』は連載当初から読んでいたわけではない。『ジャングル大帝』も後の単行本で読みました。『リボンの騎士』などは少女マンガということもありますが、ずっとあとになって読んだ、そんな読者です。でも、かなりの手塚マンガにふれて興奮、大きくなったらマンガ家になろうと決意したものでした。

で、もつとも印象に残っているマンガは何かと言えば、月並みですがやはり『鉄腕アトム』。未来社会でのかわい口ボットの活躍に、心奪われたわけです。『鉄腕アトム』は「少年」という月刊雑誌に載っていて、発売日より1日早く売ってくれる本屋さんまで歩いて行って、兄といっしょに「少年」を買う、それが何よりの楽しみでした。

この第二世代は、ちょうど団塊の世代に合致します。戦後の1940年代後半に生れた人たち。47年、48年、49年あたりに誕生した世代は、数の上ではとても多い。

そのため、子どもを相手にした商売にとつて、よいお得意さんなのでした。戦後に出されたマンガ雑誌の多くが、この世代に向けて出版されてきたのです。だって、数が多くと売れ行きもいはずですから。

日本のストーリーマンガを中心としたマンガ文化は、こうした読者が支えていたのです。マンガが大好きで、マンガの善し悪しをよく理解している。専門的な見方ができる。そのため、この世代のコアな一部の読者を、一時期「マンガ青年」と呼んだこともありました。

自分のことをいいますと、マンガ家を目指して、同人活動に没頭。高校を卒業したら、上京してマンガ家になろうと真剣に考えていたものです。

事情は複雑ですが、結局上京せずに大阪に居残り。そして、大学を卒業する時期になり、卒論を書く必要が起きます。『鉄腕アトム』をテーマにとりあげ、手塚先生にインタビューを試みたのです。ここらあたりの思い出は、書き出すときりがなくなりますが、とにかく青春時代は、マンガ、マンガ、一色でした。

さて、そういったマンガ青年たちにつづく、手塚マンガ

の読者とは、いったいどんな世代なのでしょう。第二世代のあとの第三世代とは。おそらく、『ブラック・ジャック』や『三つ目がとおる』を、1970年代に読み興味を魅かれた子どもたちということになるはず。第二世代と少し年齢が空く。その理由は、手塚先生が大人マンガにシフトしていった時期が、あいだにはさまるためです。

もちろん、それ以降も(1989年の逝去のあと)手塚マンガを読み始めた若い人がいるので、第0世代という言い方は、ずっと名づけることが可能かもしれません。しかし、マスとして同じような手塚体験をしてきたのは、第一、第二、第三世代に限られるのではないかと思います。

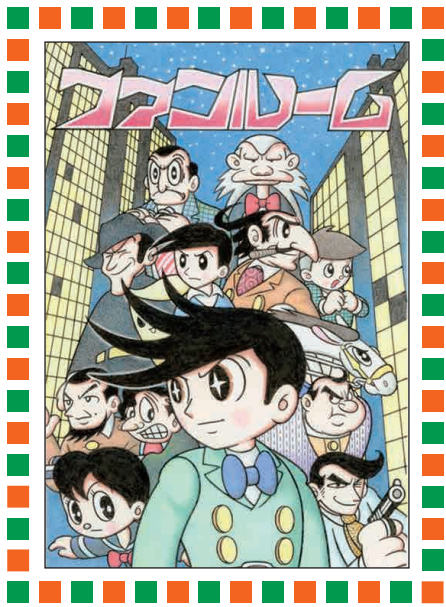
当然、世代ごとに好みのマンガが異なる。評価する部分に違いが生じる。それは仕方ないことです。しかしながら、時代がかかえもつ感性の違いを越えて、手塚マンガが愛読されていることは、あらためてスゴイことだと思おうのです。

ただし、ある不安も。かつて児童文学の世界では、明治期に巖谷小波という巨人が現れて、昔ばなしを児童文学にグレードアップする仕事をしました。当時は大人気。しかし、現在ではあまり小波は話題になりません。手塚治虫という巨人も、同じ運命をたどるのか。あるいは手塚先生だけは別格で、何十年、あるいは百年後にも、巨匠として人々の記憶に残っているのでしょうか。ほんとうのことはわかりません。分野が大衆ものだけに、危惧する気持ちが大きいのです。

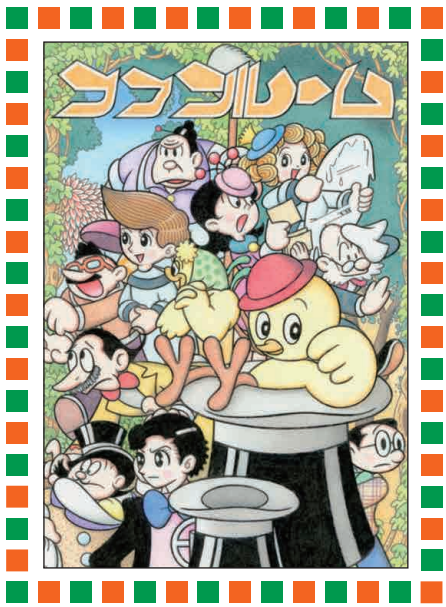
この連載の読者、とりわけ10代や20代の若い方々へ。手塚マンガが今後どう評価されていくのか、注意深く見守ってくださることをお願いいたします。そして、手塚マンガのおもしろさを、できるだけ次の世代に伝えてください。私がこの連載で行ってきたように……







26-0014 石川雅啓

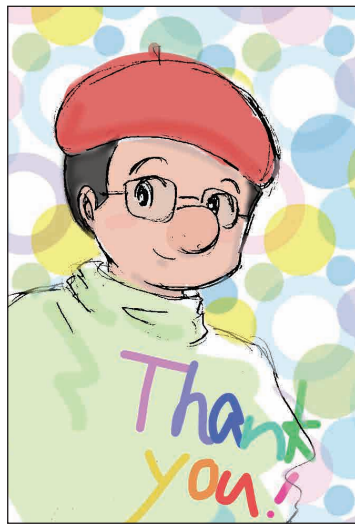


26-0014 石川雅啓

『40年間ありがとうございました』  
 26 | 0014 石川雅啓  
 いつもイラストを載せていただきありがとうございます。シ  
 ルクハット物語のイラストを描きましたのでお送りいたします。  
 手塚ファンマガジンが毎月送られて来るのでも楽しみにして  
 おりますが、341号を読んで大シヨックを受けました。まちが  
 いなく全員が同じ気持ちだと思えます。手塚ファンマガジン  
 が休刊になってしまうとは考えたこともありませんでした。とて  
 も残念で、これから何を楽しみに生きていけば良いのかという思  
 いです。私は手塚ファンマガジンが、これからもずっと400号、  
 500号と続くものと信じておりました。しかしよく考えてみる  
 と、私は0号からの会員で、40年も続いたことは凄い事だと思  
 います。色々な思い出があります。和田おさむさん頑張ってくださ  
 い。今までイラストを載せていただきありがとうございます。  
 最後に手塚治虫ファンクラブがどうなってしまうのかとても心  
 配です。私は死ぬまで手塚治虫先生の大ファンであります。  
 それでは、編集部の皆様、40年間の手塚ファンマガジンの発行  
 ありがとうございます。



15-0827 ひろし



22-0680 三浦綾花



13-0571 秋永将輝  
 手塚ファンマガジンに参加できた時間は、私にとって大きな大きな宝物です。心より感謝の気持ちと愛を込めて。

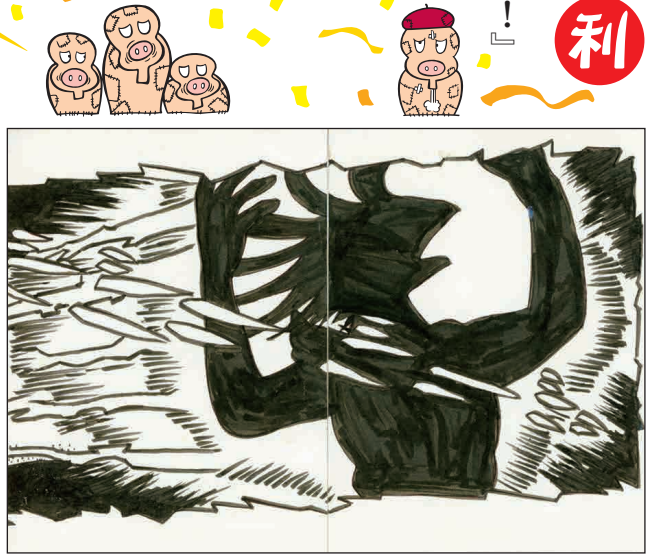
お題 『とにかく手塚先生ありがとう!』  
**手塚イラスト大喜利**



15-0801 松本芳子  
 ファンクラブに関わった皆々様  
 感謝です!!  
 ありがとうございました。  
 これからもずっとファンです♡



04-0030 佐々木康弘  
 チョコラ  
 「私を生んでくれてありがとう」



12-0670 菊地直人  
 元の姿、命光一へと戻って、コミカライズ版を  
 描いて頂いた事を感謝!



## 「手塚ファンマガジン休刊」

15-0827 ひろし

令和元(2019)年8月某日、月に一度の楽しみ「手塚ファンマガジン」がポストに入っていました。ファンマガジン341号を読んでいくと、ファンルームで「手塚ファンマガジン休刊のお知らせ」の記事が書いてあって悲しかったです。

私が手塚ファンになったのは平成16(2004)年、NHKで『火の鳥』のアニメが放映されてからです。その後給料が出ると手塚先生のマンガや手塚アニメのDVDを買っていきました。その頃好きになった作品は『三つ目がとおる』です。『三つ目がとおる』は、作品も好きですが、和登さんの方がもっと好きです。和登さんはいつも写案のことを庇い、時には叱咤激励し、常に優しく接していたからです。

ここ最近、各方面で起きているコミュニケーションの欠かからくる泥仕合、権力者が弱者に圧力をかけ、潰していくという悲しく見苦しいニュースが、連日のように報道されています。和登さんのような人がいたらこのような事になっていなかったかもしれません。

やがて「手塚治虫ファンクラブ」に入会し、イラストなど投稿し、手塚先生が執筆したエッセイなどを読んで手塚作品の事が好きになっていきました。

ファン大会の時に、ファンの方と話したりしたのにも楽しい思い出です。森口博子さんのバラード曲「あなたといた時間」じゃないですが、「手塚ファンマガジン」にイラストを投稿している時が楽しかったです。

その後イラストでは和登さんの他に、トッペイ、千里万里子、「アトムザビギニング」の各キャラのイラストも描いたりするのが楽しかったです。

最後になりましたが、手塚プロ並びに手塚ファンクラブの皆さん、今までありがとうございました。またイラストなどを投稿できる機関、パソコン、スマホを持っていない人たちも利用できる機関があったら嬉しいのです。が・・・。

「手塚ファンマガジン」は、これから先も不滅です」



今年もファン大会実行委員会(武田聖二朗さん代表)

による「ファン大会」は企画されていますし(案内が同封されています)、田浦紀子さんによる、手塚先生ゆかりの地をめぐるながら作品の背景を知ることができるサイトもリニューアルされました。  
「虫マップー手塚治虫ゆかりの地を訪ねて」  
<http://mushi.map.com/>

13-0571 秋永将輝

突然の休刊、大変驚きました  
和田さんには、メールでのやり取りを通じまして、大変お世話になりました

本当にありがとうございました  
また手塚ファンマガジンでのお忙しい毎日、  
本当にお疲れ様でした

今後とも、お身体に気をつけて、  
すてきな毎日をお過ごしください  
手塚ファンマガジンに参加できた時間は、

私にとって大きな大きな宝物です  
心より感謝の気持ちと愛を込めて



## 手塚先生、兎に角、有難う!!!

25-0292 時雨蟬丸

手塚先生の諸作品は「差別」と「偏見」を根底に扱ってきました。『0マン』『パンパイヤ』『アドルフに告ぐ』『ブツダ』『シユマリ』『鉄腕アトム』『どろろ』... etc...。

多様性(相互理解)が求められ乍ら、国家レベルでも個人間でも不寛容さの蔓延する現状こそ、手塚漫画が、もともとクローズ・アップされるべきではないでしょうか。数々の名作を残してくれて、手塚先生、ありがとうございます!!!

11-0002 戸田 誠

さびしいです。

和田さんありがとうございました。すごい人、二階堂黎人さん。毎月脳がはじけました。さようなら。和田さんに幸あれ。僕は会員番号が0002です。0001の方ってどんな人なのかなあ・・・。

22-0680 三浦綾花

この度、手塚治虫ファンマガジンが休刊になるとのことでご挨拶に投稿させて頂きました。

9年前に初めて訪れた手塚治虫記念館でファンクラブの案内を頂いたことが入会のきっかけでした。当時私は中学生で周りに手塚ファンも少なかったもので、ファンクラブは貴重な情報源であり、自分の大好きな世界に浸れる場所でもありました。40年もの刊行を続けられたということは率直に凄いことだと思います。休刊になってしまふのは残念ですが、ここまで手塚治虫ファンの環を広げて下さった代々の編集者の方、関係者の方々、そして会員の方々に感謝です。

投稿をはじめとして皆様には大変お世話になりました。またどこかでお会いできますことを願っています!今までもありがとうございます。

P.S ずっと昔から頭に浮かんでいたけれど心の中に留めていた川柳を、この際なので成仏させて下さい:(笑)

○ ジュジュちゃんに 服着せつけて 四谷さん

(低俗天使より)



## ファンマガジン休刊に寄せて

27-0846 田浦誠治

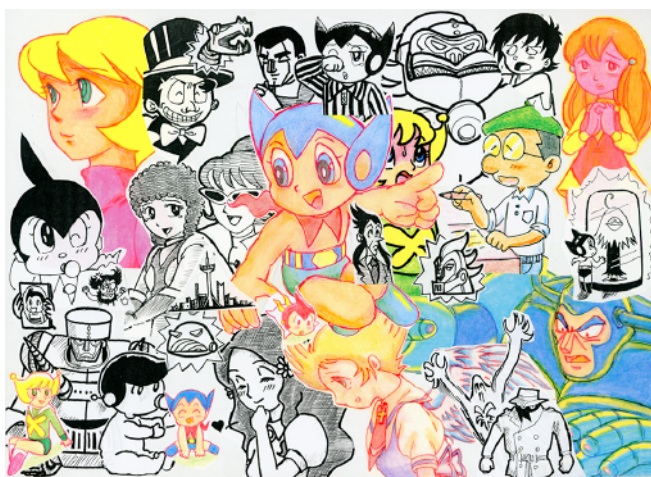
思えばファンクラブに入会したのは、手塚先生が逝去された1989年であった。初めて手元に届いたファンマガジンは181号。表紙は「新ジャングル大帝」のレオとライヤであった。思ったよりサイズが小さく、ページが薄い、との印象だった。しかしその後、「手塚治虫 夢ワールド」のレポートや手塚治虫記念館レポート、度々の会員アンケート祭りなど、思い出深い号が続出した。毎月(入会して暫くは毎月ではなく、忘れた頃の発刊だった)が、苦笑。ポストを覗くのが楽しみだったものだ。なにより一番の感謝は、ファンマガジンを通して、小田実風に言うならば「人生の伴走者」と出会った事である。最後は「ファウスト」や「アドルフ」にちなんで、こよう。

ダンケシエーン、ファンマガジン!

僕は昭和30年代から手塚治虫先生の漫画とアニメで育ちました。手塚先生の作品は楽しく、元氣と勇氣、感動、希望を沢山いただきました。手塚先生には本当に感謝でいっぱいです。和田さん毎月楽しいファンマガジンありがとうございました。休刊は残念ですが、いつの日かファンマガジン復活願っています。  
手塚ファンマガジン万歳／＼／  
長い間ありがとうございました。

12-0562 富田尚志

「マルスのイラスト投稿をかれこれ10年近くやりました。毎月1枚ずつ、とても楽しかったです。休刊は残念ですが、ありがとうございました」



14-1596 齋藤一昭

ファンマガジンが休刊とは…茫然です。手塚作品が“紙”から産まれただけに、手塚作品に関する情報もファンマガジンの様に“紙”で読む事にこだわっていたかったのですが…。なかなかファン大会に足が運ばず、せめてファンマガジンへ投稿し手塚作品や先生への思いを誌上で語ったり、他会員の様々な思いや関係者の方々による先生の思い出等を読む事が毎月の楽しみでありました。

266号からサイズが大きくカラー化されたのは嬉しく、特に最近では毎号表紙での珍しい数々の原稿の掲載も嬉しい企画でした。投稿を何回も載せていただきましたが、いつかは川柳やイラストにも挑戦したい、と秘かに燃えて（笑）いたので、残念無念。ファンクラブ自体は存続するのですか？いつの日かの復刊を期待しつつ、手塚ファンとして作品を読み返し、語り続けます。ところで野口文雄氏、お体の具合はいかがですか？連載記事「キネマシアター」が未完で終了するのは惜しいですが、回復されたら是非とも書き足して単行本にして欲しい。では「手塚ファンマガジン」の昭和・平成・令和を通しての活躍に御礼を申し上げ、ひとまずはお疲れ様でも本当に寂しい！

### 手塚ファン川柳大全

○ サイン会 優しい笑顔 大きな手

14-0239 出井博毅

※サイン会での手塚先生の笑顔と握手していただいた時の先生の大きくやわらかくて、そしてふっくりとした手の温もりが忘れられません。

○ ケン一 の ふしぎ旅行記 素敵だよ！

14-1990 大多康弘

○ ソグの声 加瀬康之は 同期生

12-0670 菊地直人

※2009年10月10日、日本公開のATOMに同じ声優科で学んだ、加瀬康之君がソグの声として出演

○ ピノコちゃん どこまでこだわる 18ちゃん

41-0055 首藤美代子

○ さようなら 会報終了 寂しいな

14-1375 田中 昭



### 手塚治虫の TVマンガ

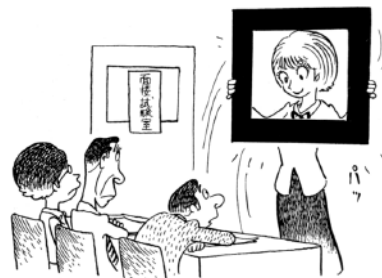
「ザ・テレビジョン」(角川書店)に掲載されていた、当時のテレビや世相を風刺した1コマ漫画。

掲載期間：  
1982年10月1日号～1984年11月30日号  
1985年12月6日号～1986年10月24日号

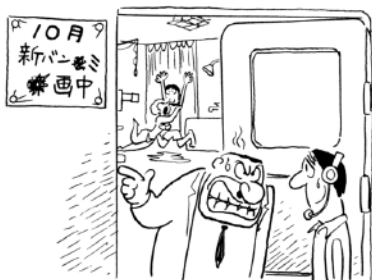
1986.10.17

1986.10.24

1986.10.10



ね 面接官のセンセ  
あたし テレビフレームだと見違えるでしょ



キミツ・・・こ・・・これはグにもつかない  
ロクでもないと読ませるイヤミなにかね！



知的水準の高い国

### FCのつばやき



343号。いよいよ最終号となりました。かれこれ40年、沢山の人がたが、たすきをつないできました。何より読者の方々があってこそこの「手塚ファンマガジン」でした。感謝の言葉しかありません。関わって下さったすべての方々に御礼申し上げます。最後に、読者の皆様ありがとうございました。またいつか。

【和田】



まさに、読む複製原画。肉筆に迫る工芸品!

**どろろ**

漫画原稿再生叢書  
手塚治虫・著

日本のマンガ史を飾る名作マンガの、現存する生原稿の全体を、実際の原稿用紙に近い紙質の用紙に、4~5色で入念に印刷再現。180度開けるコデックス装で製本&函封入した特殊造本シリーズ。黒インク、墨汁、カブラペンやGペンで刻まれた伝説が、今ここに!



醍醐景光の地獄堂での契約、どろろと百鬼丸の出会い、魔物退治と眼珠恢復の計51ページを原寸大で収録。

●10月末刊行予定・ご予約受付中! ●A3判/函入り/コデックス装/完全限定 予価:23000円+税

11月刊行

**火の鳥2772 [カラー完全版]**

原作・手塚治虫  
作画・御厨さと美



手塚×御厨の黄金コンビによる伝説のコミカライズ、初の[完全版]仕様!

アニメ超大作『火の鳥2772』(1980)唯一のコミカライズ。全屏絵&全カラーページ完全再現! 迫力のA5判! 御厨さと美・新規インタビューや、手塚×御厨対談収録。

●A5判/ソフトカバー/222P予定/予価:5000円+税  
●弊社通販特典=オリジナル冊子「2772追跡ノート(仮題)」



発売中



**火の鳥オールカラー画集 [愛蔵版]** 手塚治虫・画

手塚美学の極致。不滅の名作「火の鳥」のカラー画を、初の集大成!

定番の名画から、マニアも驚く超レア画までを徹底網羅。初収録の絵柄多数、初出データも完備。

●A4判/ソフトカバー/102P  
6800円+税

第2巻 10月刊行



**マイクロイドZ/S** 《オリジナル版》手塚治虫・著

幻の“Z”パートを、初の完全再現!

1973年・雑誌初出版を忠実に再現。巻末ギャラリーや図説も大充実!

●全2巻/B5判/ソフトカバー/第1巻=発売中/第2巻=10月発売 各6800円+税(第2巻は予価) ★弊社通販特典=A4複製原画(非売品)



★「ブラック・ジャック大全集」全15巻 ◆重版(仮予約受付中!) このチャンスに、ぜひどうぞ!! ★

特報!!

近日刊行

**鳥人大系**

《雑誌初出版》

**七色いんこ**

《オリジナル版》  
大全集

ご期待  
下さい!!

絶賛発売中! ◆悟空の大冒険 [コミック版] (出崎統著) ◆やっけっぱちのマリア 《オリジナル版》 ◆LL (アイエル) 《オリジナル版》 ◆人間昆虫記 《オリジナル版》 ◆クレオパトラ [完全版] (坂口尚・作画) ◆おとなの絵本 千夜一夜物語 (やなせたかし 絵/白石かずこ文) ◆MW 《オリジナル版》 1・2 ◆奇子 《オリジナル版》 上・下 ◆鉄腕アトム アーリー・エピソード 《「少年」オリジナル復刻版》 (弊社通販限定) ◆ブッダ 《オリジナル版》 復刻大全集 全10巻 ◆手塚治虫美女画集 ロマネスク [増補新装版] ◆手塚治虫 SFヒーロー画集 [増補新装版] ◆青いトリトン 《海のトリトン オリジナル復刻版》 全2巻 ◆長編冒険漫画 鉄腕アトム [1956-60 復刻版] 全8巻 ◆長編冒険漫画 ジェンガ大王 [1958-59 復刻版] 全4巻 ◆リボンの騎士 [少女クラブカラー完全版] ◆リボンの騎士 《なかし オリジナル版》 復刻大全集 全4BOX ◆三つ目がとおる 《オリジナル版》 大全集 全8巻 当社通販限定・3大オリジナル特典(冊子「和登サンがいつい!」、複製原画セット、ポストカードセット) 付は残り僅か。お見逃しなく!!